



福井の教育のすばらしさを若い世代に

福井県小学校長会 会長

小島 敏弘



あとわずか38年間の教員生活を終える頃になって、時間の経つ速さを感じながら、これまでの経験を振り返ることが増えてきました。担任した子どもたちや同僚の先生方との出会い、自分なりに頑張ったことや失敗したことなどが蘇ってきます。全校児童24名の小学校に赴任し、学校近くの寄宿舎での下宿生活。放課後や休日には子どもたちと一緒に遊んだり勉強したり、夜は地域の青年団との交流。勤務時間など考えずに過ごした、本当に楽しい初任校での日々でした。赴任した冬にはいわゆる56豪雪。3メートル近い積雪での生活も思い出になっています。その後は、福井市の中学校に勤務。生徒指導に苦勞しながらも生徒とともに部活動に力を注いだ時期でした。また、理科教師として、夜遅くまで先輩の先生と教材談義をするなど、多忙感よりも充実感でいっぱい若き教師時代だったと思います。しかし、今思うと家族には何らかの犠牲を及ぼしていたことは否定できません。

本校が初任校である20代の教員に「今悩んでいることは」と聞くと、「仕事をどこまでやっていいかその線引きが難しい。長時間勤務の問題と新学習指導要領への対応との狭間で、どうしたらよいか悩んでいる。どうしたらもっとスキルアップできるか。」という答えが返ってきました。日ごろより実に前向きで、意欲に満ちた教師であると感心していますが、これからも挫折しながら乗り越え、すばらしい教職生活を送って欲しいと願うばかりです。今の若い先生は、当時の私と比べて格段に高い能力をもっていますが、失敗を恐れずに

自分の考えをぶつける点では、その機会が少ないように感じます。校長としてそのような環境をつくり、多くの経験の機会を与えることも必要ではないでしょうか。

「倒産寸前から年商4倍、10年以上離職率ほぼゼロ」と注目された日本レーザーという会社の近藤宣之社長は、会社の目的は社員雇用と社員の成長である。また、社員を動かす原動力は、①「言いたいことが何でも言える明るい風土がある」②「社員が会社から大事にされていると実感している」③「会社は自分のものだという当事者意識をもてる」と述べています。このことは学校にもあてはまります。校長として、先生方にとって働きがいのある職場そして風通しの良い職員室をつくること、それが学校経営の第一歩であると思います。

福井県の先生方は日々の熱意と努力を重ねることで、大きな成果を上げてきました。今後急速に先生方の世代交代が進んでいきますが、先輩から受け継いできたそのすばらしさを失うことなく若い世代に引き継いでいくことは、私たち校長の使命です。どうか、各学校の先生方に福井県の教育のよさを伝えていってください。そして、自信をもって福井の子どもたちを育てていただくように、声かけをお願いします。

結びになりますが、福井県小学校長会のますますの発展を祈念するとともに、本會報の発行に対しましてご指導、ご協力いただきました関係各位並びにご尽力くださいました皆様にご心から感謝申し上げます。

「福井の教育」の更なる向上に向けて

福井県教育委員会 教育長

東村 健治



校長先生方には、日ごろから、本県の小学校教育の充実・発展のために多大なる御尽力を賜り、深く敬意を表します。今年3月、池田中学校の生徒が亡くなるという事案が発生しました。尊い命が失われたことは極めて残念であり、その原因が学校・教員の不十分な生徒理解と不適切な指導とされたことについて、教育に携わる者として重く受け止めています。学校は大切な子どもたちの命を預かっているという意識を常に持ち、二度と子どもの尊い命が失われることがないように、すべての職員の危機管理意識を高めながら、チームで対応する体制づくりの徹底をお願いします。

さて、近年、福井は教育県として注目を集めており、昨年度は、すべての都道府県から2,700名を超える教育関係者が視察のために福井を訪れました。また、本県の学校で直接学ぶため、今年度は5つの府県から派遣された11名の先生が小・中学校で勤務されています。これもひとえに、子どもたちが授業や家庭学習、体力づくりに意欲的に取り組んでいる成果であるとともに、先生方の教育に対する強い責任感と熱心な指導のおかげであると感謝します。

本県ではこれまで、学習の基盤を培う読書活動、社会力を育む体験活動、豊かな感性を磨く芸術教育の推進に力を入れてきました。

今年度は、学校に巡回する図書を2冊から3冊に増やすとともに、1クラスあたりの巡回日数を長くし、子どもたちが家庭に持ち帰って読書に親しむ機会をさらに充実させました。また、地域コーディネーターを配置し、学校と地域がより強くつながって企画や提案などを行う体験活動を142校で実施しており、来年度はすべての学校で取り組んでいただく予定です。芸術教育については、弦楽や日本画を中心に取り組んできましたが、新たに書道団体等と連携し、書写の授業等に指導員を派遣することにより書写・書道教育の充実を図っています。

これからも、すべての教科等を通して、子どもたち一人一人の多様な可能性を高めていくようお願いします。

現在、小学校の教員の約4割が50歳代であり、この後10年間で世代交代が一気に進むことから、ベテランの指導力を若手に引き継いでいくことが急務となっています。

県は、シニア・ティーチャーの配置や先生方の自主研究への支援などに加え、今年度は、各学校の優れた教材や指

導法、校長の学校経営に関するマネジメントを冊子にまとめました。子どもの実態や学校の実情に合わせて柔軟に活用していただき、福井の高い教育力を維持していきたいと考えています。

平成28年度の本県の不登校児童数は、前年度に比べて25人増加しており、小・中学校における1,000人当たりの不登校者数は4年連続で増えています。

この事実を真摯に受け止め、新たな不登校を生まないように、家庭や関係機関との連携をより一層図りながら、通うのが楽しい魅力ある学校づくりを進めていかなければなりません。県としても、今まで以上に児童の状況を積極的に把握し、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の外部人材を活用したチーム対応をより一層充実させ、事態が深刻化する前に学校をサポートする体制を強化していきます。

一方で、国の調査によれば、先生方の週当たりの勤務時間は、10年前に比べ、小学校で4時間長くなっており、長時間勤務の実態は看過できない状況です。

先生方が授業研究をしたり児童と向き合ったりする時間を増やすために、県では、事業のスクラップや報告書等の簡素化などについて検討するとともに、学校運営支援員等の配置を拡充していきます。学校でも、業務の効率化や精選、外部人材の活用などの働き方改革を行うとともに、新学習指導要領を確実に実施していくようお願いします。

校長先生方がリーダーシップを発揮され、地域とのつながりを一層強め、子どもの幸せと可能性を拓く学校経営に努めることにより、福井県の高い教育レベルの更なる向上につなげていただくことを期待します。



時流潮流

福井が誇る世界的な水晶学者 市川新松氏の水晶コレクション

福井市自然史博物館特別館長

吉澤 康暢



いちかわしんまつ
市川新松氏(1868～1941年)の水晶コレクションは、日本の鉱物学研究の黎明期にあたる明治・大正・昭和初期にかけて、水晶の蝕像を研究し続け、世界的な研究業績を残した鉱物学者市川新松氏が研究に使用した水晶をはじめとする鉱物標本類のコレクションである。これら水晶等の鉱物標本類は、市川新松氏の孫にあたる市川啓氏の邸内(福井県越前市中新庄町)に建設されている「市川鉱物研究室」内に、当時のまま約77年間手つかずに保存されている貴重な文化遺産である。



この市川鉱物研究室は木造2階建てで、所蔵標本総数は7,727点である。標本類の内訳は、国内外の鉱物・岩石・化石等の標本類をはじめ、水晶や瑪瑙細工の工艺品・研究に使用した顕微鏡や写真機類・著書・研究論文・直筆原稿・独力で製版し印刷した図版の版木や銅版・各種研究資料・学会誌・書籍等膨大な資料が整然と整理されて残されている。この貴重な水晶コレクションを調査・研究する機会に恵まれ、約4年の月日(平成19年6月～平成23年6月)を費やし、その全貌を明らかにすることができた。調査・研究の結果、知り得たこのコレクションの価値等について述べる。



市川新松氏の水晶コレクションの大半は、水晶をはじめとする国内外の鉱物標本である。2階の鉱物・岩石・化石標本総数は4,323点。1階の鉱物・岩石・化石標本総数は3,404点。合計標本総数は7,727点。アメリカのアルバニー博物館等から寄贈された標本数は286点。カナダ鉱山局から寄贈された標本数は71点である。日本の寄贈者の主な人物は、若林弥一郎氏、岡本要八郎(北投石の発見者)、桜井欽一氏、比企忠氏、今吉隆治氏、渡辺新六氏、納村章吉氏、市川渡氏などである。所蔵する標本中最も多い鉱物は、珪酸塩鉱物の水晶や沸石、柘榴石、トパーズなどで、次いで炭酸塩鉱物の方解石、硫化鉱物の黄銅鉱や黄鉄鉱、硫酸塩鉱物の重晶石や石膏、その他元素鉱物などである。また同一鉱物種でも、晶相の違い、色調の違い、産状の違いを比較できるように、また、同質異像鉱物や類質同像鉱

物も網羅されている。美しい結晶標本が多いことも大きな特徴である。多くの標本には、標本名、産地、入手経緯などの詳細な記録が残されている。特に天皇陛下に献上した標本類を始め、世界に先駆けて発表した論文、それに使用した天然蝕像を持つ水晶や水晶球の人工蝕像の標本類、カナダ鉱山局やアメリカから寄贈された鉱物標本類、色々な種類の水晶標本類などが、所狭しと展示されている。ここは鉱物学を志す若い学徒にとっては最高の研究の場となるであろう。また、水晶の天然蝕像や人工蝕像を志す研究者も数々の研究用標本を観察することにより、多くの知見や参考になるところ大であると思われる。1階には主に県内外の当時稼行していた鉱山から得られた貴重な鉱物標本類が保存されている。現在では二度と手に入らないものばかりである。さらに、研究論文や「福井県鉱物誌」を出版した際の福井県産の鉱物や岩石標本が記述どおりの標本が保存されており、それを追研究することができる貴重な場にもなっている。

この研究室は大正～昭和初期の建物であり、一種独特の雰囲気がある。また、市川新松氏がここで研究生活をし、生涯を過ごし、使用した標本類がそっくりそのまま残されている貴重な空間であり、存在の意義が大きい。氏が生涯をかけて取り組んだ研究は、水晶をはじめとする各種鉱物の天然蝕像および人工蝕像の研究であったが、その研究業績や絶えざる努力の証は、研究室の標本箱や著作、メモ、手紙類など、いたるところに当時のままの姿で保存されている。その現状を一目見れば、訪問の機会を得た市民や若い学徒の方々は、感動と共に市川新松氏がいかに傑出した人物であったかが理解できるであろう。氏が生涯を閉じてから約77年の時が経過しているが、この研究室に入ると、大正～昭和初期にタイムスリップしたかのような感におそわれる。現代で活躍する大人たちは勿論、未来を生きる子どもたちがこの研究室を訪れることにより、貴重な体験をし、各々が人生の大切な指針を得るものと思う。

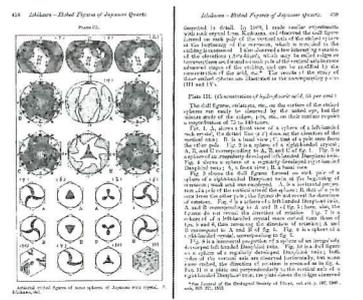


次に市川新松氏の水晶コレクションの価値についてまとめてみた。

- ①市川鉱物研究室は、まるで約77年前のタイムカプセル。市川新松氏の生き様をはじめ、生涯のほとんどが記録・保存されている。
- ②約7,700点もの水晶標本をはじめ、国内外の珍しい多くの鉱物標本を所蔵しており、鉱物学を志す若い学徒の研究の場として貴重な存在になる。
- ③水晶の蝕像をはじめ、各種鉱物の蝕像の研究をした、研究標本の全てが残されている。市川新松氏がどのような標本から何を発見し、どのような考察を試みたかが分かる。
- ④水晶・鉱物標本以外に残されているものには、著書、論文、著書の手書き原稿、スケッチ、標本写真、印刷木版、写真銅版、手紙、カタログ、顕微鏡、写真撮影装置、当時の新聞切り抜きなどがある。これらは、氏の生き様や人生などをありありと語ってくれる。
- ⑤標本の価値について
 - ・約7,700点もの水晶や鉱物標本が整然と、きれいに整理されている。
 - ・1種類ずつ標本箱や標本ビンに入れられており、ラベルには鉱物名をはじめ、産地や詳細な観察メモが添えられている。
 - ・論文や「福井県鉱物誌」に記載されている水晶の蝕像標本や鉱物標本がそのまま残されており、追研究が可能である。
 - ・現在では、二度と採集不可能な鉱物・岩石・化石標本ばかりで、標本一点一点の価値は非常に高い。
- ⑥市川新松氏の人間性に触れる場としての価値について
 - ・好奇心、向学心にあふれていた。
 - ・独学、独力、創意工夫を常に行っていた。
 - ・自然を愛し、水晶や鉱物の研究を楽しんでいた。
 - ・真面目、几帳面、時間をむだにしなかった。
 - ・各地の標本採集の努力を惜しまなかった。
 - ・鋭い観察力を持ち、独創的な多くの実験を考えた。
 - ・各種結晶のていねいな観察と記録を行い、数多くの精細な図版を作成した。
 - ・確かな英語力が論文作成や海外の学者との交流に役立った。

市川新松氏は、1868年(慶応4年)に福井市三尾野町の打方新兵衛の二男に生まれた。26歳のとき、越前市中新庄町の市川弥治兵衛氏の養子となった。独学により34歳で三重県師範学校の助教諭になり、38歳で山梨県師範学校教諭となったが、その頃から水晶の結晶の表面に表

れる蝕像に興味を持ち研究を始めた。その後、生涯をかけて水晶の蝕像の研究を続けよう決心し、39歳で教員をやめて中新庄町に帰り、水晶をはじめとする各種鉱物の天然蝕像および人工蝕像の研究に没頭した。そして、水晶の蝕像に関する独創的な研究結果をアメリカの理学雑誌「AMERICAN JOURNAL OF SCIENCE」に「日本産水晶の蝕像に関する研究」として発表するなど多くの研究業績を残した。これらの論文は、アメリカの著名な鉱物学者でありこの理学雑誌の編集者であるデナ教授の目にとまり、水晶の蝕像に関する論文としては世界的な先進研究として注目され、高い評価を受け、カナダで開催された万国地質学会にも招待された。1918年(大正7年)に、大正天皇大礼記念事業として自宅邸内に研究室兼書斎として「市川鉱物研究室」をつくって研究に専念し、1933年(昭和8年)「福井県鉱物誌」を日本語版と英語版の両方で出版した。1941年(昭和16年)73歳で生涯を閉じたが、亡くなる直前まで研究・執筆・印刷し続けた432ページの大著「日本産鉱物の蝕像に関する研究」は、長男の市川渡氏(金沢大学名誉教授)によって1974年(昭和49年)出版された。



市川新松氏は、水晶の結晶面に現れた天然蝕像などが、水晶の結晶構造を解明するためには重要な構造であることに早くから着目した。日本各地から得られた水晶標本に始まり、ブラジル産の水晶まで、各種濃度のフッ化水素酸に長時間浸し、その際に現れる蝕像の変化を調べ、多くの重要な結果を得た。水晶の各面に現れる蝕像が、結晶の対称性に支配されていること、蝕像の対称性から結晶の右手型と左手型の区別や双晶の種類などが判定できることなどを発見した。また、水晶球をフッ化水素酸で溶解すると、最後には三角錐のような形になることなども発見した。これは、水晶の結晶成長の逆順をたどることに相当し、水晶を構成する原子のらせん構造などの結晶構造解明にもおよんだ。これらの研究成果は、現代の文明を支えるパソコンや携帯電話などに使用されている、精密な水晶振動子を量産するための人工水晶製造の先駆的研究となった。

このように日本の鉱物学研究的黎明期にあたる明治・大正・昭和初期の研究資料や鉱物標本類が、ほとんど散逸せず、鉱物研究室内に往時のままの姿で残されている例にはない。この貴重な文化遺産を、ぜひ後世に残していつてほしいものである。

日本国内の鉱物コレクション一覧

	コレクション名	総数	所蔵先
1	市川新松水晶コレクション	7,727点	市川鉱物研究室
2	和田維四郎コレクション	4,000点以上	東京大学総合研究博物館、生野鉱山
3	若林弥一郎コレクション	1,932点	東京大学総合研究博物館
4	桜井欣一コレクション	63,000点	国立科学博物館、神奈川県生命の星・地球博物館
5	高壮吉コレクション	1,200点	九州大学

退職校長の言葉

「常に現場を見て考える」

福井市松本小学校長
吉田 高志

管理職になって一番力を入れてきたのは、教室の巡視です。教室に入って先生方の授業をしばらく見て、子どもたちのノートなども見て歩きます。

筆記用具がきちんと揃っているか、ノートに月日や題名が入っているか、下敷きを入れているかということも気になる点です。

教室にしょっちゅう顔を出し、時には長居するのですから「いやな管理職がやってきたものだ」と思われてきたのかもしれない。

私もそんなに鈍感ではありませんので、教室に入るときには、少し気がひけるのです。

それでも、ほぼ毎日授業を見て歩くのは、「現場を見ていなければ何も分からない」という思いが強いからです。

たとえば、担任から子どもの指導について相談を受けても、見ていなければ答えようがありません。1ヶ月、あるいは2ヶ月と継続して見ていて分かることもたくさんあります。担任から相談を受け保護者と面談をし、お医者さんと直接会って話をしたことも何回かあります。

児童への指導について保護者から疑問の声があがったときにも毎日の巡回が非常に役に立ちました。例えば、特別な支援を要する児童への学習指導などでは、担任の話だけでは、なかなか納得していただけないこともありました。そこに校長の目が加わることで、よい話し合いができたことがたくさんありました。

主に若い先生にですが、授業についての助言もよくしました。もちろん学年主任もしっかりと指導してくれましたが、日々の授業を学年主任が見る機会はそう多くありません。チョークの使い方や座席配置など、細かなことまで具体的に話をしました。

今の若い先生方は大変です。私が若かった頃には、「若い」というだけで大目に見てもらえたことがたくさんありました。指導が不十分だったところを、「のこし」で補うということも日常的にやっていました。

今はそうはいきません。「どの先生に担任してもらっても同じ質の教育を受けることができるようにしてください。」と厳しく指摘されたこともありました。

この他にも、ホームページの製作からパソコンの操作や設定まで、いろいろなところに顔を出し、あれやこれやと(余計な?)世話を焼き続けてきました。

私は、管理職になったときに「常に現場を見て行動する」と決めました。管理職生活10年、この点は貫けたかなと思っています。38年間、ずっと現場にいたことができたのが一番の幸せでした。

教員生活を振り返って

永平寺町松岡小学校長
田原 浩

新採用で大野市の小学校に赴任して以来37年、今年度で教職の道を退職することになります。その間、小学校・中学校・高等学校(全日制と定時制)そして教育委員会など15の勤務先を経験し、いろいろな面で他の先生方にはないような経験をさせていただきました。

また、社会体育や部活動面でも、ミニバスケットボールやスキー部・山岳部・合唱部・バドミントン部・陸上部・マーチングバンド部・吹奏楽部を担当し、ほとんどの部で全国大会や国体・北信越大会への出場権を得ることができ、すばらしい児童・生徒や保護者・同僚に恵まれたと感謝しています。

小学校3年生から高校3年生まで担任し、専門の理科を教える中で、いろいろな学年における児童・生徒のつまづきに気付くことができました。そして、その原因を考える過程で、以下の結論を得るに至りました。

①教科の「系統性」

小学校あるいは中学校だけで勤務している教員が多いため、その校種における教科の系統性は把握できても、小中間や中高間の系統性はなかなか掴みきっていない教員が多いように思われます。児童・生徒にこの単元で学んだことが次は何年生のどこに出てくるのかきちんと伝えることで、教科に対する興味・関心や内容の深化におのずと違いが出てくるように思われます。

②指導の「継続性」

授業時数には限りがあり、しかも時間内にたくさんの指導項目があるため、せっかく教えた内容が定着しないまま忘れ去られてしまう場面が見受けられます。授業始めの5分でもいいので、その日の新聞やテレビに掲載された記事や出来事を通じて、学んだことを振り返らせることで、繰り返し記憶を呼び戻すことが大切です。

③教科の「横断性」

例えば植物の成長は赤土と黒土でどちらがしやすいか考える場合、社会科で学ぶウクライナの国土地帯が穀倉地帯になっていることを関連させたり、溶解度の単元と家庭科の洗濯用粉石鹸を結びつけたりすることで、教科横断的な深まりや興味の広がりが見られると思います。

④生活に結び付けた「日常性」

単に受験や成績アップのための勉強は無味乾燥で退屈でしかないと思いますが、勉強したことが日常生活の様々な場面で活用されていることを学べば、教科に対する見方は大きく変わるものと思います。

個人的な雑感を述べましたが、教育界を取り巻く環境が日々大きく変わる中、福井県小学校長会や福井県の教育界が、これからも日本をリードしていく存在であることを願ってやみません。

たくさんのつながりに感謝します!

「近況」

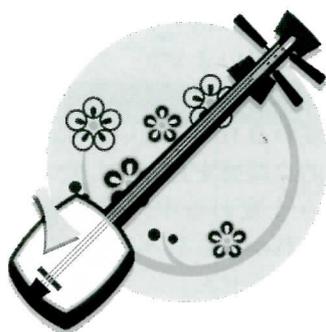
勝山市立村岡小学校長
竹内 敦子

先日、本校に於いて4人で和太鼓・三味線・ディジュリドゥなどの演奏をするコンサートを開催しました。初めは和太鼓奏者とのつながりで依頼しましたが、なんと、ディジュリドゥ演奏者が中学校勤務時代に担任した生徒だと分かりびっくりしました。コンサートの中の話で「この母校の校長先生には、中学校2、3年に担任してもらいました。迷惑をかけたこともあったけれど、今年退職すると聞きました。長い間ご苦労様でした。」という挨拶をもらい重ねてびっくりしました。仲間と共に珍しい楽器を演奏し、立派な挨拶をする彼の生きる姿を見て心から嬉しいと感じました。本校の保護者の中には、彼と同級生が何人もいます。立派なお父さんやお母さんになっているのも嬉しいことです。自分にとってはなかなか厳しい中学校勤務でしたが、いつながりがたくさんできました。同様に今までに担任したり関わったりしてきた人たちやその家族の方々のつながりをこれからも大切にしていきたいと思っています。

平成30年2月28日に本校では6年生英語科の公開授業を行います。6年生担任が「校長先生の最後に私が授業をさせてほしいのです。」「校長先生が言うのならいくらでもします。」と言ってくれました。大変心強い言葉です。このような教職員が多く勤務する学校で退職できることは感激の極みです。

そして、物的・人的・人情的に学校を支えてくださるPTAや地域の方々とのつながりを深められたことも大きな財産です。この仕事に就いたからこそ、紡ぎ合えたつながりです。

最後になりましたが、今まで目標としてきた諸先輩の先生方、仲よくつきあってくださいました同僚の先生方、自分が培ってきたものを少しは伝えられたかなと思っている後輩の先生方とのつながりが、長く勤務を続けることができた大きな原動力です。管理職として同じ勝山市で夫と共に働くことを勧めてくださいました市教委、県教委の方針も、自分にとってはつながりのおかげと感謝しております。「たくさんのつながりに・・・ありがとうございます。」



あわら市伊井小学校前校長
北風 満雄



平成29年3月31日、60歳をもって38年間の教職生活を終えた。

退職する間近になって、人生で初めてこれからの自分の歩むべき道を選ばなければならない、ということに気が付いた。以前はのんびりと自分の好きなことをして、残りの人生をゆったりと過ごしたいという気持ちが大半を占めていたが、いざ退職が近づくと、周りがざわざわと再就職の話を始めたり、後輩の先生方からは「やめたら何をしますか?」と聞かれたり、また、退職説明会でも、「長年培った指導力を是非学校教育に生かしてください。」などと言われてたりすると、少々焦りが出るのであった。しかし、再び教職に就く気持ちはやや薄く、教職とは違ったことをしてみたいという気持ちもあって、今は市の臨時職員として働く機会を得て、国体に関する仕事をしている。毎日、若い人たちに囲まれ、新しい空気を感じながら過ごさせてもらっている。仕事は若い人のようにこなすことはできないが、いろいろと助けてもらいながら何とか8か月を過ごすことができ、今はありがたいという気持ちが強い。60歳はまだまだ体力と知力・経験値がある。望めばいくらでも働くことができる時代なのかもしれない。健康寿命が70歳と言われる現在、残り10年と聞くと正直短い感じもするが、元気なうちはもう少し頑張ってみようかと思う今日この頃である。

さて、最近は休日を利用して、山登りに出かけることが多くなった。私がよく登る山は、福井市と鯖江市の間にある文殊山である。この山に初めて登ったのは確か高校生の頃で、秋の遠足か何かで登った覚えがある。その時の印象はただつらいだけで、山登りは自分には向いていないと感じさせてくれた山だったが、その後、身内の薦めで10年ほど前から登り始めた。標高365mの山だが、四季を通じて趣がある。春は可憐なカタクリが咲き、夏は馬の背を通るさわやかな風が疲れを癒してくれる。紅葉の名所となっている場所もあり、秋には大勢の人でにぎわう。冬は枯れ葉の道を歩くのもいいし、冬晴れの日に見る白山の姿は何とも言えない。頂上で沸かして飲むコーヒーの味も格別である。飛騨や信州の名高い山もいいが、身近で簡単に登れる山が今の自分には合っているように思う。

この年齢になると、健康についての話題が多くなる。友人と話をしても、健康診断の数値や健康法の話で盛り上がる。私にとって山登りは、自分の健康・体力測定のパロメーターでもある。これからも、無理のない程度の楽しい山登りを続けていきたいと思っている。是非皆さんも一度登ってみてはいかがですか。

プログラミング教育に思う

鯖江市神明小学校長
吉村 隆之

「『その名前の教員は、同級生にはいません。』とS教諭は言っていたぞ。」新採用で勤務していた美浜町から異動の挨拶に伺った南条中学校の校長先生の言葉でした。S教諭とは高校3年間同じクラス、正真正銘の同級生だったのですが、忘れられていました。

また、一昨年ようやく大学の同窓会北陸支部が設立されたのですが、その席上でほとんどの方に「高校の教員は知っていますが、小学校の校長先生の同窓生とは初めてお会いします。」と驚かれてしまいました。

大学でコンピュータを学び、工業と数学科の教員免許を取得できたことをきっかけに教師の道へ進み、義務制の教員をしていることに不思議がられながらも、なんとか定年退職の春を迎えることができそうです。

これまでの教員生活では、出身大学の名前に加え、学校現場でのビデオデッキなどのAV機器やパソコンの普及により、教科教育よりも校務分掌上の視聴覚教育、情報教育で多くの経験をさせていただきました。特に、平成元年の県視聴覚教育研究大会授業校として、南条中学校でパソコンを使った授業の先駆けとして県内から大勢の先生方に参観していただいたこと、そのためのパソコン室の設計から機種選定まで携われたことが、その後の教員としての立ち位置を方向付ける貴重な出来事となりました。

このようにパソコンの黎明期から学校での活用に関わってきましたが、鯖江東小学校の校長のときに、鯖江生まれの子ども用パソコン「IchigoJam」を紹介され、再びBASIC言語によるプログラミング教育普及に一役買うことになりました。今、テレビやエアコン、冷蔵庫など身近なものにコンピュータが内蔵され、プログラムの働きで便利な生活が送られるようになっています。さらに「IoT」、モノ同士がインターネットでつながり、人工知能が様々なところで判断を下す時代を迎えています。子どもたちがコンピュータや人工知能が出す指示を鵜呑みにするのではなく、これからも人間らしく生きていけるよう、世の中がプログラムで動いていることを知り、様々なテクノロジーと向き合える力の育成がますます重要となっています。

新学習指導要領でもプログラミング的思考の育成が取り上げられましたが、「IchigoJam」によるプログラミング体験を通して、子どもたちに世の中の仕組みを理解させ、論理的な思考力を養い問題解決力を育てようとして取り組んでいる鯖江市をこれからも応援していきたいと思っています。

感謝!

越前市花筐小学校長
平岡 正実

至誠にして動かざる者は 未だ之れ有らざるなり
(至誠而不動者 未之有也)

意味は「誠の心をもって尽くせば、動かなかった人など今まで誰もいない」…でしょうか。

校長会の全国大会である第67回全連小・山口大会で、山口県に行った際、松下村塾に立ち寄る機会を得ました。そこで出会った吉田松陰先生のこの言葉。子どもたちの前に立って、日々、奮闘している先生方を見ると、教育という仕事の崇高さをあらためて感じます。また教師という職業に、深い愛情と使命感、情熱を持って取り組むことの大切さを思わないではいられませんでした。

松陰先生の門下生であった高杉晋作先生は、こんな言葉も残しています。「おもしろきこともなき世をおもしろく…」一見すると、享乐的で無頼な印象も受けるこの言葉ですが、幕末という、時代が大きく変わろうとする時に、命を惜しまず、人のお役に立ちながら己の生を全うしたい、という強い決意の表れのようにも思いました。

今、退職に際して、教育現場で次代を担う子どもたちの育成に関われた幸せを痛切に感じています。そして、子どもたちへの深い愛情、高い使命感と情熱を持った素晴らしい教師集団に囲まれて育てていただいたこと、学校を支えていただいた保護者、地域の方に心から感謝したいと思います。

小学校長として過ごした2校で、いずれも視察に見えた県外の教員や教育委員会の方が、児童の授業中の態度の良さと授業の質の高さを指摘して帰られました。そして、その秘密を聞かれるのですが「先輩の教員たちが、長い年月をかけて地道な授業研究を重ねてきたこと。教師と児童の信頼関係に支えられて、授業や学校教育活動が行われてきた賜物です」と答えてきました。

大量の教員が退職し、それにとまって新採用教員が急増している現在、こうした本県の高い教育文化と言えるものを是非継続してほしいと願うと同時に、退職後も、何かしらお役にたてたらと考えています。

県の施策である「地域と進める体験推進事業」は2年目を迎え、現任校でもスクールプランに位置づけて、着実な実践を重ねてきました。地域の教育力を生かした、魅力ある学校づくりが、校長のマネジメント能力にかかっていると思います。背伸びせず、今あるものを大切にしながら進めていかれてはいかがでしょうか。

最後になりましたが、校長先生方のご健勝とご多幸をお祈りしております。



はながたみプロジェクト

「卒業証書」

感謝

敦賀市立栗野南小学校長
増門 玲子

若狭町立三方小学校長
石地 弘

平成30年3月14日。勤務校の卒業証書授与式となります。

2年前に本校に着任し、校長として手渡す最後の証書は「第3561号」。校長になりたいと思った理由の一つには、この「卒業証書」が大きくありました。初めて浄書を担当したのは、敦賀西小学校6年主任の時でした。それから、学年主任の立場で気比中学校と栗野中学校を、教頭として成新小学校・敦賀西小学校の卒業証書を浄書する過程で、いつか増門玲子と記された証書を一人一人に手渡したいと夢を描いていました。

平成23年4月1日に、校長として敦賀北小学校に着任した初めて証書は、「第6460号」でした。これまで1,200枚あまり記してきた時は、浄書への緊張感でしたが、校長としての7年間は、一人ずつの生年月日と名前、証書番号の一筆一筆に、思いを託してきました。

名前の文字に、両親や家族の願いや愛情、由来が伝わってきます。「優」「心」「夢」などが多い近年、我が子に求めるイメージは時代が変わっても、昔も今も大きな違いはないことを、この時季になると今更ながら強く感じます。

学校というパブリックな社会で、子どもたちが学んだり感じたりすることは、その子の人生の中でほんの僅かな空間と時間だと常々感じています。教育の最終目標は「人格の形成」であり、私ども学校教育者として、目の前の子どもたちにできることは、ほんの僅かのように感じます。もちろん、学校で学んだ学習や生活、人間関係力など、トータルすると莫大な学びであったことは間違いありません。一枚の卒業証書に値する学びを一人一人に保証する努力こそ、私たちが真剣に求め続けていく姿だと思います。

学校経営者として、教職員に求めてきた「教師の姿」を東井義雄氏の詩に重ねてご紹介します。

川は 岸のために流れるのではない
川のために 岸ができるのだ
子どもは 教師のために生まれてきたのではない
子どものために教師ができたのだ
子ども一人一人の生き方の流れの
美しさ たくましさ おもしろさを認め
それに沿って指導の岸を構築してくれる教師に
子どもは 魅力を感じる

福井県の子どもたち一人一人の健やかな成長と、福井県小学校長会の益々のご発展とご活躍を願います。

退職を迎えてこれまでの教員生活を振り返ったとき、何よりも思うことは、人とのつながりの大切さです。今日まで教職という仕事を全うできたのは、多くの人たちの支えがあったおかげだと改めて痛感しています。

新採用の赴任先は敦賀市の栗野小学校でした。初めての授業参観で教室の後ろに居並ぶ保護者を前に大失敗し針の筵の学級懇談後に「とにかく一生懸命だった先生を私は応援しているから頑張ってください」と言ってくださったある保護者の一言。助けられました。それからは、大いに反省し、空き時間には先輩の授業を見せてもらい、放課後には悩みや愚痴を聞いてもらい、失敗しながらも貴重なアドバイスをもらって、多くのことを学びました。保護者の信頼を得るためには、まず、目の前の子どもたちの信頼を得ることです。子どもが先生を慕い、毎日学校に通うことが楽しいとき、保護者は安心して信頼するのです。

教員生活15年目からの4年間、町の教育委員会に派遣社会教育主事として勤務しました。学校から離れて地域の中で、対象が子どもから大人に変わり、初めてのことも多々ありました。もう若気の至りは通用しません。厳しいこともある中で、様々な立場の人と交わる中で、そこでも多くの人に助けられ、学校では経験できないことも地域の人たちから学ぶことができました。学校に戻って仕事をする上で、その時の経験が役立つこともたくさんありました。

管理職になり10年経ちました。同じ教員でありながら管理職の仕事は、当然それまでと異なります。まず、職員の信頼を得ることが必要になってきます。教頭になりたての頃はその意識が低く、教諭の頃と同じ調子でいました。管理職としての自覚や責任の重さに気付かせてくれたのは職員でした。2校で教頭としての5年間に4人の校長に仕えました。その年に退職する校長2人、新任の校長2人です。それぞれの経営方針やその時々への対応に多くのことを学びました。そして、校長として岬小学校に赴任しました。常神半島にある小中併設の小さな学校です。その1年目の秋、台風18号による土砂崩れで通勤路が断たれました。約1か月の間、船や波が高い日は歩いて山越えでの通勤が続きました。この時も保護者や地域の人たちをはじめ多くの人たちのおかげで何とか乗り切ることができました。現任校の三方小学校は、若かりし頃に9年間勤めた学校です。保護者の中には当時の教え子がたくさんいます。決していい思い出ばかりではないと思いますが、みんな協力的でいろんな面で助けてくれています。ありがたいことです。教師になって良かったと思うと同時に感謝の思いでいっぱいです。感謝、感謝です。

今朝の校長講話

校長先生の思い出、福井国体

永平寺町吉野小学校長
大西 泰弘

実に、50年ぶりに、福井県で2度目の国体が開催されます。永平寺町では、バスケットボール、ハンドボール、ソフトボール、元気大会ではグラウンドソフトボールの競技が行われます。

さて、今から50年前の昭和43年9月から10月にかけて、福井県で初めて国体が開催されました。その時、校長先生は小学校2年生でした。その国体にまつわる思い出を、お話ししたいと思います。

まず、学校の玄関や歩道には、サルビアの真っ赤な花が咲いたプランターがたくさん並べられていました。赤色があまりにも美しく鮮やかだったので、とても強く印象に残っています。

そして、国体が始まる前には、大本山永平寺で炬火リレーの火がともされ、そこから福井県内にリレーが始まりました。炬火と国体の旗を中学生や高校生のお兄さんお姉さんたちが持って走るということで、沿道に応援に出かけました。また、天皇皇后両陛下が、お車に乗って、松岡町の役場前をお通りになるということで、日の丸の小旗を持って、天皇陛下をお迎えしました。

国体が始まると、松岡町民体育館では、男子のバスケットボールの試合が行われました。小学校から体育館までの約2kmを歩いて、全校児童で応援に行きました。観覧席から見たバスケットボールの試合は、とてもかっこよくて、ユニフォームのランニングと短パンの白い色が印象に残っています。応援の仕方がよくなかったようで、その時の校長先生から「どちらのチームも公平に応援しなさい」と注意を受けたこともありました。

一方、町にはホテルや旅館などの宿泊施設がなかったの、よその県からいらっしゃった選手の皆さんは、ふつうの家庭に泊まりました。このようなお泊まりの仕方を民泊といいます。町内の家に、たくさんの選手たちが民泊をしました。みなさんのお家で、選手たちがお泊まりした家があるかもしれませんね。その民泊がとても好評で、美味しい食事と疲れをいやせる温かいもてなしでみなさん大喜びだったと聞いています。このようなことが、校長先生の記憶に残っています。

いよいよ、2度目の福井国体。吉野小学校に近い総合グラウンドでは、ソフトボール競技が行われます。小学生として、国体でお手伝いできることはあるでしょうか？この機会に、是非、みなさんができることを考えてみませんか？応援の旗を作ったり、プランターで花を育て、会場を花一杯にすることもできるでしょう。

福井国体にいらっしゃる選手のみなさんを、心を込めてお迎えしましょう。そして、すばらしい大会になるように、吉野っこ全員で、応援していきましょう。

「ありがとう」の貯金箱

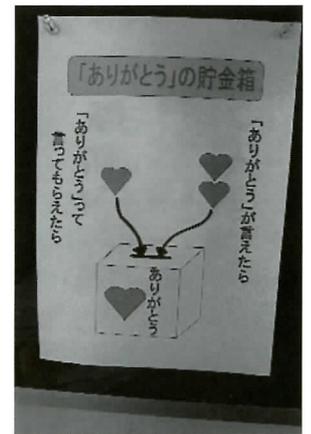
大野市乾側小学校長
大塚 俊浩

乾側小学校には、三つの約束事があります。「明るいあいさつ 乾側」、「安全・安心 乾側」、「相手にあったか 乾側」の三つですね。今日は、その3番目の「相手にあったか 乾側」について、話そうと思います。

みなさんは、「相手にあったか」の「あったか」をどんな風に考えていますか。「やさしくする、よくしてあげる、相手の気持ちを考えた言葉遣いや行動をとる、悲しくさせたりつらい気持ちにさせたりしない、仲間はずれにしない、悪口を言わない」など、いろいろと考えられると思います。

校長先生も、「あったか」について考えてみました。「相手にあったか」というと、「相手に（自分が）あったかくする」ということを考えます。でもこれはなかなか難しいことです。相手の人のことを思って、自分でいいと思ってしてみても、それでよかったのか分からないこともあります。じゃあどうすればいいのでしょうか。何かそのことが分かるものはないか考えてみました。ありました。私たちの心をあったかくしてくれる魔法の言葉が。普段みんなが普通に使っている言葉です。何だと思いませんか。そう「ありがとう」です。自分が何かしたときに相手が「ありがとう」と言ってくれると心があったかく、うれしくなります。ということは、自分も相手がしてくれたことに「ありがとう」と言ってあげれば、相手の人もあったかい、うれしい気持ちになるのではないのでしょうか。友達に、お家の人に、地域の人に、先生に普通に「ありがとう・ありがとうございます」という言葉が出るようになったら、「乾側っ子の約束の三つ目」ができたこととなります。校長先生は、この乾側小学校が「あったかい」雰囲気のある学校になってほしいと願っています。

最後に皆さんに提案をして終わります。みなさんの心の中に「『ありがとう』の貯金箱」を作ってください。この貯金箱は「ありがとう」って人から言われたら、ハートを一枚貯金できます。そして「ありがとう」って周りの人に言えたら、ハートを2枚貯金できます。ハートが一枚入るたびに、その貯金箱はみなさんの心の中で、きっと素敵な音を立ててくれます。どんな音か耳を済ませて聴いてみてください。貯金箱に「ありがとう」のハートが1枚入るたびに、あなたは自分や周りの人を大切にする人になれます。だまされたと思って、取り組んでみてください。校長先生からのプレゼントです。お話を聴いてくれて「ありがとう」・・・お、聴こえたかい！



優しさで一杯の学校に

越前町立宮崎小学校長
小辻 洋三

9月1日は防災の日です。10万人の人が亡くなった関東大震災が起きた日です。また、この時期は夏から秋への季節の変わり目で、台風など荒れやすい天気の日が多いそうです。今日は台風に関わる話をします。

127年前の9月に起こった本当の話です。エルトゥール号は、トルコに帰るために東京から神戸に向かっていました。和歌山県沖にさしかかった時、猛烈な台風による嵐のために、岩礁におつかり沈没してしまいました。そして、多くの船員が海に放り出されました。

事故を知った村人達は全員総出で救出活動を始めました。男達は、おぼれている船員を命がけで海から助けあげました。女達は、冷たくなった体を温めたり、炊き出しをしてトルコの人達に食べさせたりしました。

その結果、650名のうち69名の尊い命を救うことができ、遠く離れたトルコの首都イスタンブールに生き残った船員を送り届けました。トルコの人達は、このことを教科書にのせ、日本と日本人への感謝の気持ちを忘れないようにしていたそうです。

エルトゥール号事件から100年後、イラン・イラク戦争が起きました。その当時のイラクの大統領は、「今から48時間後に、イランの上空を飛ぶ全ての飛行機を打ち落とす」と宣言しました。現地の日本人は、大急ぎで空港に向かいましたが、残念ながら215人の日本人が取り残されてしまいました。

その時、当時のトルコの大統領が「今こそエルトゥール号の恩を返そう」と取り残された日本人を助けるためにパイロットを派遣することを決めました。

日本中があきらめかけていたとき、成田空港に2機の飛行機が降りてきました。トルコ航空の飛行機でした。その飛行機は215人の日本人を全員乗せ、無事に日本に送り届けてくれたのです。このことは、日本政府も知らないことでした。なぜ助けてくれたのでしょうか。トルコ大使は次のように答えたそうです。

「エルトゥール号事件での日本人の優しさは教科書にのり、トルコ人なら誰でも知っています。これは100年前の恩返しです。」

その後、トルコ大震災が起きたとき、215人の日本人は日本中を駆け巡って義援金を集めました。日本からも直ぐに救援部隊がトルコに派遣されました。また、東日本大震災が起きた時に、世界中で一番早く救援に駆けつけてくれたのはトルコ部隊だったそうです。

日本とトルコの人たちのように、宮崎小学校が、友達を思う優しい気持ちや互いに助け合う行動、ふわふわ言葉で一杯になってほしいと思います。

手つなぎ鬼ごっこ

美浜町立美浜中央小学校長
森本 哲

皆さんは「手つなぎ鬼ごっこ」という遊びを知っていますね。鬼がタッチしてつかまえた人と手をつないで、まだタッチされていない人をつかまえにいく遊びです。時間がたつと、鬼の人数が増えて列も長くなっていきますね。

あの「手つなぎ鬼ごっこ」をちょっとちがった見方で見てみましょう。

鬼というと悪い感じもしますが、仲良くなって手をつないだ人たちだとしたらどうですか。ひとりぼっちでいる人を見つけて「一緒に手をつなごう」と、みんなでさがしていく。一人でいる人がいなくなったら終わる。いい遊びだと思いませんか。

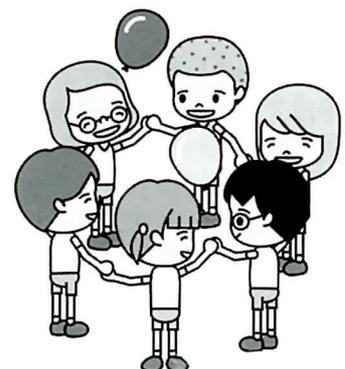
ところで、手つなぎ鬼ごっこのお話にはまだ続きがあります。

最後の一人がつかまるとそれで遊びは終わります。その時、何人かで手をつないだ列がいくつかできていますね。それぞれの列の両端の人は、片方の手が空いています。ほかの人はみんな両手が誰かとつながっているのに。では、全員の両手が全部つながるにはどうしたらいいでしょう。

そうですね。いくつかの列が集まって、大きな一つの輪になるように手をつなげばいいんです。そうやってつながってみると、みんなが真ん中を向いて、全員の顔を見ることが出来ます。みんなが一つになったんだという気持ちになれます。手つなぎ鬼ごっこの最後はみんなで輪になって終われるといいですね。

そして、列になっているときは自分たちの後ろが見えませんが、輪になると向かいの人が自分たちの後ろを見てくれます。そこに誰か一人でもはずれていたら見つけてくれます。全員で心と力を合わせて、ひとりぼっちをつくらない。

皆さんはもう気付きましたか。今日は手つなぎ鬼ごっこのお話から入りましたが、学級の仲間づくりのことをお話ししたかったんです。皆さんの学級はいつも仲良くしていると思いますが、それはいくつかの列ができていただけではありませんか。だれかがとり残されてはいませんか。「いえ、そんなことはない。わたしたちのクラスは一つにまとまっています。」ということなら、次はこの学校全部が一つの輪になることを目標にがんばっていきましょう。



人事行財政対策委員会

本委員会では、主に2つの活動を行った。1つは「県教育長と語る会」に向けて、校長会としての話題提供をまとめることで、各地区で話題になった要望などを委員会でまとめた。もう1つは、全連小三地区対策担当者連絡協議会で話し合うために、本県の現状と課題をまとめることであった。

1 県教育長と語る会

8月18日、県小中学校長会11名、県教育長ほか県教委11名出席。本年度も、校長会側が現状と課題を述べた後に質疑応答に入り、その中で要望も伝えていくという形にした。

①生き生きとした児童・生徒を育成するために

校長会側から、様々な支援員の配置や派遣、高校入試制度改革について、各校での具体的な取組状況を説明した後、教育長をはじめ各担当者と意見交換を行った。

②次の時代を担う元気な教職員を育成するために

校長会側から、小学校英語の教科化、各種補助事業や旅費、教職員の業務改善について具体的取組状況の説明の後、意見交換を行った。

2 全連小東海北陸・近畿地区対策連絡協議会

10月24日、大阪で開催され、13府県が参加。

①教職員の働き方改革への取組状況について

学校における働き方改革について、各都道府県教育委員会や市区町村教育委員会において対応が進んでいる。各府県の教員の働き方改革の取組状況について、情報交換を行った。

効率的な働き方や教員の意識改革も必要であるが、仕事を減らすために何をすべきか、学校や行政、地域等も含めて考えていく必要がある。業務負担軽減のためには、人的配置を増やす必要があり、定数改善を求めていく方向で一致した。

②外国語活動・外国語等の実施に向けた人的配置の状況について

語学の指導にあたっては担任だけでは不十分な部分もあり、各府県、各市町村とも専科教員やALT等の人的配置が行われていることが状況報告により明らかになった。しかし、人的配置については、設置自治体の考え方や財政力に大きく依存することもあり、自治体間の経済格差が学力格差につながりかねない。

外国語の指導に特化した専門教員の配置を要望する必要があるとの共通認識を得た。

(文責：福井市円山小学校長 金子 兼三)



調査研究委員会

調査研究委員会では、『社会の変化に即応した安心・安全な学校づくりと校長の役割』をテーマに、今日的な学校教育の課題、学校経営上の諸問題や社会の変化に即応した学校の取組について、調査研究を行った。

1 調査項目の設定

- ①県民の信託に応える小学校教育の在り方や学校評価の在り方に関する課題
- ②全国学力・学習状況調査の結果公表及び各都道府県における学力調査の結果を生かした学力向上策や授業改善の取組に関する課題
- ③教員の資質・能力の向上に関する課題
- ④少人数教育の推進、道徳教育の充実や小中一貫教育の推進をはじめとする中央教育審議会答申の対応等、新たな教育改革・教育施策に関する課題
- ⑤教育課程の編成や学習評価の改善に関する課題
- ⑥校長の職能に関する研修の課題
- ⑦特別支援教育の推進に関する課題
- ⑧教員の生徒指導力の向上に関する課題
- ⑨学校の安全対策についての課題
- ⑩今日的な課題に即応した学校づくりに関する課題

2 調査の結果

各学校では、学力向上や授業改善に向けた取組が行われている。また、教員の資質と能力の向上も、大きな課題となってきた。そんな中で校長がリーダーシップを発揮しながら、学校現場が抱える課題解決に必要な組織運営の工夫や実効性の高い取組を実施しようとしているが、いくつかの課題も浮き彫りになってきた。

授業研究や指導方法の改善を進めていく中で、各学校の校長が指導力を発揮しようとしている。つまり、学力向上や授業改善は全国のどの学校でも大きな課題であり、校長が強い意識を持って臨もうとしている。また、指導法や評価法を含めた授業の改善を行うことや、教育目標達成のために学校経営への参画意識を高めることが、課題だと考えている。すなわち、学校が抱えている教員の指導力の向上と、学校組織の強化という今日的課題である。

特に、新たな教育改革・教育施策に対する関心が高く、安心して安全な学校生活を保障することに、喫緊の課題を感じている。英語や道徳の教科化や、不審者侵入を防止する新しく古いこれらの課題に対する解決方法として、教員の配置、人的な措置や財政面でのバックアップの必要性を訴えているが、なかなか難しい状況にある。

社会の変化に即応した学校づくりのヒントは、学校が単独で教育活動を行うことではない。地域連携や保幼小連携、専門機関との連携を密にして、自分の学校以外の知恵や支援を得ながら、学校を活性化することである。

終わりに、アンケートの実施や集約などご協力いただいた県下小学校長をはじめ、調査研究委員の皆様から感謝を申し上げる。

(文責：福井市春山小学校長 齊藤 洋二郎)

教育研究委員会

1 活動の報告

第69回福井県小学校長教育研究二州大会に向け、小学校教育の在り方と校長の役割・指導性等について実践的な研究を推進した。大会では、全連小の研究主題「新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進」のもと、副主題として「豊かな心と確かな学力を身につけ、未来社会を」を掲げ、福井型8分科会において活発に研究討議を行った。

また、本大会の提案発表の中の3つの実践内容を、東海・北陸愛知大会において発表し、東陸各県の校長による研究協議に生かすことができた。

2 主な活動内容

(1) 第1回教育研究委員会

期日：4月18日(火) 会場：県教育センター

- 年間活動方針、年間事業計画について
- 28年度各研究大会の概要について

(2) 第2回教育研究委員会

期日：6月8日(木) 会場：福井市美術館

- 第69回県小学校長教育研究二州大会について
- 全連小佐賀大会および東陸愛知大会について

(3) 第69回福井県小学校長教育研究二州大会

期日：8月22日(火)

会場：プラザ万象 生涯学習センター 市図書館

- 教育研究委員会より、駐車場係、受付係として運営補助に当たる。

○福井型8分科会に分かれて提案発表・研究協議を行う。
(各分科会の提案者)

- | | | | |
|---------|------|--------|----|
| ①学校経営 | 敦賀北小 | 服部 康昌 | 校長 |
| ②教育課程Ⅰ | 朝日小 | 松田 敬子 | 校長 |
| ③教育課程Ⅱ | 日新小 | 横田 充宏 | 校長 |
| ④現職教育 | 雄島小 | 山崎 修二 | 校長 |
| ⑤危機管理 | 志比南小 | 川鱈 和実 | 校長 |
| ⑥社会形成能力 | 三室小 | 宇佐美宏一郎 | 校長 |
| ⑦自立と共生 | 気山小 | 福田 英則 | 校長 |
| ⑧連携・接続 | 北日野小 | 品川 満 | 校長 |

(4) 第52回東陸愛知大会参加(10月5日・6日)

- 福井県より40名参加

(提案発表)

- | | | | |
|--------|------|-------|----|
| 第9分科会 | 志比南小 | 川鱈 和実 | 校長 |
| 第12分科会 | 気山小 | 福田 英則 | 校長 |
| 第13分科会 | 北日野小 | 品川 満 | 校長 |

(5) 第69回全連小佐賀大会参加(10月12日・13日)

- 福井県より20名参加 提案発表はなし

(6) 第3回教育研究委員会

期日：2月未定 会場：越前市文化センター

- 今年度の活動報告と次年度の計画等について

(文責：福井市東郷小学校長 和多田 訓子)

編集広報委員会

1 活動の報告

県小学校長会および各専門委員会の活動内容を「會報」に掲載し、全会員に知らせるとともに、平成29年度の県小学校長会の主な歩みを記録する。また、各界の先輩諸氏の提言などを受けて、校長としての指導力の向上や今日の課題の把握に資するとともに、会員相互の意見交換の場を提供する情報連絡誌としての役も果たすよう努めた。

2 主な活動内容

(1) 「會報」の編集・発行(A4版、年2回発行)

①第105号の主な内容

- ・巻頭言、県小学校長会の活動方針・内容
- ・専門委員会活動計画、校長講話、新任校長の抱負

②第106号の主な内容

- ・巻頭言、校長会に望む、時流潮流、退職校長の言葉
- ・今朝の校長講話、各専門委員会の活動(4委員会)

③委員会活動

- 第1回編集広報委員会(4/18 県教育センター)

- ・正副委員長選出・活動方針確認、年間計画

- 第1回編集企画会議(8/7 県教育センター)

- ・正副委員長による第105号の最終校正

- 第2回編集広報委員会(8/29 県教育センター)

- ・第105号の発刊・発送作業、振り返り

- 第2回編集企画会議(1/5 県教育センター)

- ・正副委員長による第106号の最終校正

- 第3回編集広報委員会(1/31 県教育センター)

- ・第106号の発刊・発送作業、振り返り・

(2) 全連小広報担当者連絡協議会(6/30、東京)

「小学校時報」、「教育研究シリーズ」、「特色ある研究校便覧」などの活動計画・情報交換、講演

(3) 全連小編集「小学校時報」等の原稿依頼、原稿執筆

- 「小学校時報」掲載

- ・5月号 有終西小 千田 佐 校長

- ・8月号 平章小 廣田 典代 校長

- ・11月号 瓜生小 田中 孝明 校長

- ・12月号 社南小 井上 政夫 校長

- ・3月号 河和田小 吉村 慎一 校長

- 全連小ホームページ「特色ある学校」更新

- ・武生東小、内外海小、気山小、長橋小、成器西小、

- 『全国特色ある研究校便覧平成30・31年度版』掲載

- ・宝永小・磯部小・花筐小・敦賀北小

- 「教育研究シリーズ」第56集掲載

- ・敦賀北小 服部 康昌 校長

(4) 依頼原稿の調整(随時)

(5) その他必要な広報活動

(文責：福井市啓蒙小学校長 川崎 清美)

編集後記

この度、『會報』第106号を発刊する運びとなりました。『會報』の発刊にあたりまして、福井県教育委員会教育長 東村健治様、福井市自然史博物館特別館長 吉澤康暢様にはお忙しい中、玉稿を賜りましたこと、心より厚く御礼申し上げます。また、会員の皆様からは豊かな経験を踏まえた貴重な原稿をお寄せいただき、お陰様で充実した内容となりました。心より感謝申し上げます。活力ある学校経営に努められ「生きる力」の育成に向け特色ある教育活動を日々展開されている会員の皆様にとって、今後も『會報』が校長としての役割を果たすための一助となれば幸いです。